

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	ヒューマニズムについての覚書
Author(s)	竹内, 良知
Citation	龍南, 240: 1-9
Issue date	1938-03-04
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7463">http://hdl.handle.net/2298/7463</a>
Right	

# ヒューマニズムについての覺書

文三 甲三 竹 内 良 知

生命的藝術から幾何學的藝術への移行を云ふ、今世紀初頭の美術界の一般的傾向を見て、愛すべき個性を持った獨斷家、T.E.・ヒュームはその遺稿集に於て古典主義の復活を望み見つゝ、『ヒューマニズムは崩壊しつゝ、あつて新しい時代が始まりつゝ、あるを私は考へる……』と書いた。然し彼の望み見た古典主義時代を云ふものは一つのミユトスであつた。ミユトスは常に要求乃至は憧憬の意味を擔ふであらう。そして、此のミユトスは、世界大戰直後に始まる『不安の文學』の時代以後更に拍車をかけられて、一九三〇年に出たバンジャマン・クレミユの『不安を再建』の中では次のやうに表現せられた。『一大古典紀は世界が再發見せられた時に直ぐつゞいて來るのがならはしであつた。』そして此の『世界の發見』を云ふことは『自己及び宇宙との交渉に於ける全人的意識把握への憧憬』であつて、三〇年を通じて繰返し論ぜられた『總合主義』的な人本主義に他ならないのである。現代に於けるヒューマニズムは、クラシツクなヒューマニズムであつて、今述べた如きヒューマニズム反抗の叫びを擧げたヒュームこそ、或る意味では却つて今日のヒューマニストであつたと思はれる。私は今、ネオ・ヒューマニズムはクラシツクなものであると云つた。そのことは現代ヒューマニズムが負ふべき當然の規定でなければならぬまい。ネオ・ヒューマニズムの課題は人間再生の問題である。それは、失はれた人間の全体的理念を探索することである。私は以前に、現代が歴史上占むべき地位について、その轉換期的な性格を指摘して來た。然し、之のことは何も私が云ふまでもなく、明白な現實として重苦しく私達の上にのしかかつて來てゐる。デイルタイはその美學史の中で、一つの藝術樣式の時代が過ぎるに必ずその次には、自然主義の時代が來ると云つたが、此のやうなことはヒューマニズムの問題についても云へるのではあるまいか？一つのイデオロギーが行き詰つた場合には、その混亂の中から一つのミユトスが生れて、そこからまた新しいイデオロギーが發生する。此の場合、新しい思想を生み出す力はヒューマニズムであつて、思

想の轉換期——即ち、時代の轉換期には常に此の力があつて、新しいアントロポロギイを作り出すのではないかと思ふ。勿論此のヒューマニズムは、思想史上、特別に此の名を以て呼ばれる時代、即ち、ルネッサンス及びドイツ古典主義のアントロポロギイを指すものではない。むしろ、すべての文化史の根柢にある者であつて、谷川徹三氏の言葉を借りて云へば『原初ヒューマニズム』である。従つて、此のやうなヒューマニズム云ふものは、常に存してゐるものであつて、何も現代の特産物ではないのである。然し、特に、現代此の要求が此のやうに喧しく擧げられてゐる云ふことが、その要求の現代的意義を表はしてゐるものであると思ふ。現代は人間のイデーが失はれた時代はない。そして、現代は、人間の再生の要求が、強烈であり、且つ、深刻である時代もない。現代、ヒューマニズムは、人間學、存在論に於ける哲學の關心と密接な聯關を持つてゐる。此のやうな時代的意味の故に、ネオ・ヒューマニズムの問題は今日、無制約的であり、絶對的である。芳賀檀氏は『今日の日にヒューマニズムを云ふこと』の悲哀を語つてゐるが、我々はそのやうな泣事を並べるよりも、進んでその性格を明らかにしたいと思ふ。

今述べた如く、ヒューマニズムは無制約的であり、絶對的である。それはルネサンスに於けるヒューマニズムでもなく、ドイツ古典主義時代に於ける文藝思潮乃至美學的意味に於けるそれとも異つてゐるのである。ましてや、ゴッリキー等のラロレタリヤ・ヒューマニズムの如きものではあり得ない。それは、文化の或る一つの部門に於けるものではあり得ない。また、單なる理論に過ぎないものでも決してない。ネオ・ヒューマニズムは理論以前のものである。文化を創り、理論を組み立てるところの、主体としての人間にかゝるものである。それは、あらゆる文化構造の底に流れて、人間文化を支へるバトスである。此の点に於て、ネオ・ヒューマニズムはミユトスの性格を持ち、その困難をも、意義をも其處に根據づけることが出来る。そして、それは、歴史的意義の故を以て、無制約的であり、絶對的である。

かゝる、バトスの側面から見られたネオ・ヒューマニズムは理論以前のものとして、むしろ人間再生の情熱の上に立つ文學の問題であらう。然し、それは、理論以前のものである故に、理論の契機として、理論にまで昂揚せられねばならない。かく、一面バトスによつて支へられ、他面に於て、ロゴスに導かれるものとして、それは世界觀の問題でもあるであらう。

ネオ・ヒューマニズムは、人間性の全体についての認識を——いな、むしろ、新しき全体人間の創造を、人間の再生を目

標とする。新しき人間のタイプの形成は、もはや、古來様様の類型によつて示された、あの人間タイプの何れかによるものではなく、また、その單なる綜合でもない。むしろ、かゝる様様の人間タイプを、歴史形成の過程に於て作り上げた人間自体についての省察から生れなければならないのである。行爲の主体としての人間のタイプが作り出されなければならない。此の方向に、その天才的な洞察力を向けた人は、キエルケゴールであり、ニーチェであつた云へる。そして、彼等によつて徹底せしめられる方向は無の方向であつた。『生より實存』への移行によつて、無の深淵に戰慄する人間の姿はその極限状況にまで押しつめられたのであつた。人間が此の方向にのみ驅り立てられる限り、何等我々は新しい人間のイデーを探すことは出来なくなつて來ることは明らかである。何故なら、そこに於ては『不安』の人間や、『絶望』の姿が見出されるに過ぎないからである。具體的な人間存在を追ひ求めて、キエルケゴールは遂に孤獨の魂をうち慄はしながら、憂愁の哲人であるより他なかつた。ニーチェはその狂氣を食つて生きるよりほかなかつた。そして、今、ハイデッガーが何を與へてくれるだらう。主体への徹底は無の深淵に沈むより他ない。かくして具體的な人間は抽象化されざるを得ない。

人間は『世界内存在』と規定される。彼は如何にしても世界から脱出することは出来ない。具體的な人間とは社會的な人間でなければならぬ。人間は主体と客体との統一に於て始めて具體的な存在であらう。三木清氏によれば、ジンメルが、十九世紀に於ける中心概念を『社會』と規定し、二十世紀に入つて、それは『生』に移つた云ふとき、『社會』なる概念は決して亡んだものではなかつた。むしろ、人間は二十世紀にあつては、『生から實存へ』の移行によつて、市民的實存と云ふ極限状況にあり、同時に階級社會の把握と云ふもう一つの極限概念を握むと云ふ状況にあつた。三木氏は、此の分裂し、對立する二つの状況——認識と創造、有と無との對立を辯證法的に統一することを以つてヒューマニズムの核心とする。然し、辯證法とは一つの現實であると同時に、課題でもある。今、三木氏の云ふ辯證法統一とは如何なる統一であるか？それは單なる論理の遊戲であつてはならない。

ヒューマニズムとは、人間的ならざるものに對する人間性の擁護である。然し、此の場合、人間的ならざるものとは何であらうか？それは人間に對する自然であるであらうか？自然に對して、人間は此を征服することは不可能ではないにしても自然の威力の前に、人間は屈服せざるを得まい。人間性の擁護はむしろ、人間が超越し得る、人間的ならざるものに對して行はるべきである。人間的ならざるものは、人間的なものでなければならぬ。人間によつて作られたものでなければならぬ。

らない。即ち、人間性の擁護云ふものは、人間の文化に對して行はなければならない。人間は文化を創造する。それは人間が作つたものである限り、人間的なものである。然し此の生の外化によつて生れた文化云ふものは、生の自己疎外でもある故に、やがて、生を壓迫することとなる。ヒューマンイズムは此の壓迫に對して起る。然し、何故に人間の生によつて指定された文化が、人間を壓迫するのであらうか？その根據は人間の歴史性にある。そして、人間の歴史性の根據は、人間の社會性にあると考へられる。人間の、歴史云ふ直線的進行に對して、之を圓環的に限定するのが社會である。そして、人間の創造する文化云ふものは、此の歴史的、社會的なもの、規定の中に立つ。歴史の進行は、古い社會から、新しい社會への脱皮の過程である。然し、何故に、古い社會から新しい社會への脱皮云ふ現象が起つて來るのであらうか？然しまた、文化云ふものが此の場合占める位置は、もつと、歴史、社會に對して複雑な關係を有つものなのではあるまいか？文化云ふものの、本質は何であらうか？文化の進展云ふことは社會云ふ問題の根本的解決による以外、眞の相は、明らかにせられない。そして、此のやうな問題が、ヒューマンイズムが最も強力であり得る爲には、是非解決せられねばならない。その問題の解決云ふことは、勿論、人間にまつて何時の世にあつても解決を迫つた眞理の解決に外ならない。現代の狀況に於て、その問題は特に我々に切實なつて來る問題である。かくして、現代ヒューマンイズムは無限定的なものとなる。従つてまたクレミユの云ふやうに『あらゆる種類の商品に蔽ふことの出来る天幕』である。然し、此れでは、何も口を開いて、ネオ・ヒューマンイズムを言ふ必要はない。何等限定のないことは、何でもないことである。それでは餘りに無意義である。かくして、ネオ・ヒューマンイズムの哲學的基礎云ふものは、最も包括的な、最も曖昧たらざるを得ない。三木清氏の有る無の辯證法的統一の觀念性も此處に窺はれるのである。

然し、ネオ・ヒューマンイズムの要求が、その故に無意義であらうか？それは、決して無意義ではない。ネオ・ヒューマンイズムは人間再生の課題を擔ふ。人間的ならざるもの、壓力は今日、最も強く我々にのしかつて來る。それに對する人間的なるもの、擁護は、人間的なるものが何であるかの説明を第一とする。而も、人間的なるものは、常に、人間的にして人間的ならざるもの、規定に於てのみ明らかにされ得る。そして、それについての理論的根據が今日、全く破滅してゐるのを私は今見た。否、今日、未だいろ／＼の理論的根據は生きてゐる。然も、その現實の姿が此のやうな混亂を呈してゐるにこそ今日の困難さはあるのだ。歴史、社會、文化についての理論に於て、人は一つの態度をさること出来る。然し、混亂は

ます。激しくなるであらう。歴史が決して、我々が正當であると思ふ道を通るものでないことを私は今痛切に感ずる。歴史自体は決して公明正大ではなからう。唯々それは單なる事實以外の何物でもないのかも知れない。そして、むしろ我々は歴史に於て、歴史の現實に於て理論を立てねばならないのであらう。之のやうな現實の立場は一刻も離れ得ない。私は今、現實に對する態度として、ネオ・ヒューマニズムを考へて見たい。

勿論、私は始めからネオ・ヒューマニズムをバトスに支へられる、理論以前のものとて規定して來た。然し私の弱い思索は此處でも困難に遭ひさうである。

ラモン・フエルナンデスは、個性について行つた研究の中で、人間の生活は何等かの *conditio* (行動律) 即ち、思想によつて統一されたものでなければならぬ。偶然の無秩序な圖形や、デスクリプションの集合であつてはならない、と云つてゐるさうである。今、私が、ヒューマニズムを、生活の現實に對する態度として考へるならば、理論以前の生活、生活の行動律との統一としてそれを考へることが出来るであらう。然し、此の場合、我々がヒューマニズムを單なる實用主義として考へない爲には、我々は世界觀の問題との繋りに於て考へなければならぬ。ロゴスを通じて現はれたバトスとして、或はバトスに支へられたロゴスとして考へなければならぬ。此の場合、ヒューマニズムはカルチュアの問題につらなる。或は藝術的制作の問題に聯關を有つ。私が、ネオ・ヒューマニズムは、哲學よりも、むしろ文學の問題であるとしたとき、それは此のことを意味した。然し、現代にあつて、藝術の問題が社會の現實から遊離したものではあり得ないことを考へるならば、藝術に於けるネオ・ヒューマニズムの問題と雖も簡單なものではなくなつて來る。時代の現實は、自然主義に育てられた、日本特有の心境小説を葬り去つて力強いリアリズムの把握を要求し、文學に於ける世界觀の要求は頓に増すに至つてゐる。文學に於けるヒューマニズムの問題は、作家の態度としての、リアリズムの問題として、『バルザックがユーロー男爵やゴリオ老人を描き出したごく生々社會的人間のタイプの創り出し得たときに初めて、それは新しきヒューマニズム文學の名に價するであらう。』と云ふ豊島與志雄氏の言葉によつて一應片がついたかに見える。此の場合、要求せられるのは文學者のカルチュアであらう。カルチュアは一面に於て個性の意味を擔ふものとして考へられる。M・アーノルドは、カルチュア・エンド・アナキーに於て言つてゐる。—— To certain manifestation of this love for perfection mankind have accustomed themselves to give the name of genius : implying, by this name, something original and heaven-bestowed in

the passion.) But the passion is to be found far beyond those man festation of it to which the world usually gives the name of genius, and in which there is for the most part, a talent of some kind or other, a special and striking faculty of execution, informed by the heaven — bestowed ardour, or genius. It is to be found in many manifestations besides these, and may best be called, as we have called it, the love and pursuit of perfection. — 一。個性的である。——むしろ個人主義的である。此のカルチユアーの理念は直ちに普遍的な全体を云ふもの結びつく。ヒューマン・バーフエクシヨン（ヒューマニズム）の理念として、カルチユアーに於て此を求めたアーノルドは without society there can be no human perfection 云々はなければならなかつた。然し彼は、全体なるものを以て、個性を全然、その ordinary — self の故に抑壓する事を最も忌んだ。そしてセイジヴィックが losing oneself in a mass of disagreeable, hard, mechanical details 云々のを、こつびぎく反撥するのである。また一九三三年の日記に、モンテーニユへの尊敬はコムニスムへの轉向に何等背違しないを書いたのは、フランスのユマニスト・ジードであつた。最近、彼がそのソヴィエト旅行記に於て、彼一流のユマニテの概念で、鋭くソヴィエトの政治を批難したこと（に於ても、カルチユアーに繋るヒューマニズムが個々普遍的の直接的な統一をなし得るものであることを示す。然し、此の場合、その直接的統一の不安定さの故に、強力なる政治に於ける種の全体の立場の爲に壓迫され勝ちである。人間の論理と政治の論理との撞着が暴露せられる。三木清氏が文學界（昭和十二年一月號）に於て説いた如きコスモポリタンが生れるのは當然である。然し、我々が現實の政治を信用するにしないに拘るゝ政治が何等かの形で我々の上に及ぶことは、嚴然たる事實である。そして之の現實に無關心なるものが歴史に於て如何な運命に陥るかは言ふを俟たないことである。カルチユアーを以て主眼とする個人主義的或は人類主義的なヒューマニズムの力弱さもまた已むを得ない。かくして、ネオ・ヒューマニズムは單なるカルチユアーの問題に止まらざる限り、その困難を冒して、人間再建の努力につぎめなければならぬ。然し單なる個人の態度としてのヒューマニズムはやはり消極的ならざるを得ない。

人間再生の問題がヒューマニズムの課題であれば、そのとき、再生さるべき人間性を云ふものは、始めから立てられてゐるものでなくして、むしろ探求されなければならない。かくして、ネオ・ヒューマニズムはあらゆる種類の『商品』を蔽ふ天幕』となり得る。その無規定性にあきたらない人々は、ネオ・ヒューマニズムをいろいろのものとて鋭く規定する。フラ

イスのフロン・ボヒュレル派のヒューマニスト、ゲエノによればネオ・ヒューマニズムは生きた人間を見つめることである。『人間に對する解釋がなべて抽象的であるとき、そして現實の生きた人間が如何なるものであるか、彼等がどんな條件のもて如何にして歴史をつくつて行くか』云ふことを考察しないとき、かゝるヒューマニストの信條は甚だ脆いものとなる。社會主義的批判の偉大さは、十九世紀の先驅的ヒューマニストが、それ等の探索を放棄した場所と時に於て、その仕事を續けたことにある。此のゲエノの言葉は、そのまゝでは正しいであらう。然しながら、唯物史觀云ふものが果して『如何にして歴史をつくる』かを最も止しく見てゐるか否かは疑はしいのである。むしろ今日のヒューマニズムは一度、人々が期待したこの史觀に、今、もはやそのまゝ、服し難くなつたが故に生れたものである。然し、又、今日我々はドイツに於けるヒューマニズムの貧困を見なければならぬ。ヒューマニズムが生物學的な民族史觀の上に立てられたとき、それは單なるギリシャ青春の復活云ふミユトスに終らねばならない。(ルードルフ・ビンドウング) すぐれたギリシャ學者であつたイエーガーは『今日ドイツではヒューマニズムはひどく相場が落ちてゐる。』と言ひ殘してアメリカに渡つた。今日、かくして、ネオ・ヒューマニズムに何等かの規定を求むるとき、我々は必ず課題の充全なる解答をもつことは出来ない。然しながら、無規定的に、たゞ單に漠然と、ヒューマンな情熱だ云つてすますのでは、ヒューマニズム提唱の意義はなくなつてしまふ。然し、我々は此のことだけは言ひ得る。現代ヒューマニズムの目標は社會的人間のタイプの創造である。現代、人間タイプとして、社會的人間が選ばれた云ふことは、かつて人間が社會的でなかつた云ふのではないことは勿論である。社會的であることは人間の本質的規定である。然し、過去に於ては、その歴史的社會的状況の故に、人間が社會的人間であることの自覺は不用であつた。資本主義初期に於ける、レセ・フェールの人間云ふものは何等社會から離れ、社會を無視したのではなかつた。それは、社會がそのやうなタイプの人間を必要としたに他ならないのである。アダム・スミスの經濟學は當時の英國の現實であつた云はれる。人間は常に社會的限定を受ける。然も、現代に於て、社會の問題は、その經濟的基礎に於ける混亂の故に、最も切實なるものとして自覺され、此處に、社會的人間が、人間のタイプとして創られねばならなくなつた。社會的人間云ふことは、創造せらるゝ人間タイプとして、我々にまつての理念であると同時に我々の現實でもなければならぬ。此の時、我々は、現實の生きた人間の如何なるものなるかを考へて見なければならぬ。理念としての社會的人間は、現實の人間の上に見出さなければならぬ。かくして、社會的人間とは、歴史的主体としての人間でな



らなければならない。何故ならば新しい人間のタイプの生成の過程は歴史の過程であるから。歴史の進行は社會の發展であり、社會の發展は歴史の進行である。歴史は、むしろ未來を望む。社會的人間といふタイプは、我々によつて創られるところの人間のタイプである。それは、我々の理念ではあつても、既に固定されてゐるものではない。創られるもの、は未だないものである。創造は虚無よりの創造である。『社會的人間』のタイプは、我々に課せられた課題である。歴史の必然は、偶然である。現實の社會よりして來るべき社會を豫定することは許されない。餘りにも合理的な唯物史觀の欠陥が此處に存する。未來は現在を牽制する。而も未來は課せられたものなのである。人間の人間である所以であらう。唯物史觀が、その純客體的なるにもかゝらず、ヒューマニズムとして考へられるのは、それが創造の論理である故であるがその創造に於ける論理の非人間的性格の故にヒューマニズムとしてそのまゝ受け容れることは決して出来ない。唯物史觀にあつて、その辯證法は雖も、なほ歴史性を明らかにしてゐない。我々にまつては、歴史的創造こそ、最も根源的に、ヒューマンなものとして考へられる。ヒューマニズムの根本原理は、人間の歴史性である。ヒューマニズムの歴史的反覆性すらも此のこゝを表はすのではないだらうか？ヒューマニズムは、存在の歴史性が明らかにせられたとき、その著しい効果を發揮する。

人間の歴史の發展と云ふことは社會化の過程にはかならない。それは人間が非社會的状況から社會的状況に入つて行くこと云ふことではない。若し、さうであるならば、歴史は考へられないであらう。人間の社會化は人間社會の發展である。人間は常に社會を構成して來たのである。然し彼は、常にその社會を脱却して新しい社會に入つて來た。人間は、その世界に於ける存在と云ふ性格故に、超越は即ち内在である。然し、何故人間は一つの社會を超越しなければならないのであらうか？人間は世界に於ける存在でありながら、何故、社會的、歴史的に限定せられなければならないのだらうか？人間は文化を創る。然し文化を創ることが社會を作る所以であらうか？むしろ、人間が社會的であるが故に文化の華も開き得るのであらう。然し、社會的である人間存在の根據については今私には充分に觸れ得ない。

人間の文化は、人間の生の自己疎外であるであらう。そして、此の人間の自己疎外からの人間の解放の要求がヒューマニズムの基礎である。人間の生は文化よりも、もつと根源的である。従つてヒューマニズムは單なる文化主義ではない。社會の發展は此のやうにして文化の發展を伴ふ。ルネサンス(再生)が可能であるのは、社會の發展によるのである。過去に

顧るこゝが、未來に期待するこゝである點にルネサンスの根據がある。それは、單なる文化の復興ではなくして、『生』の創造である。生の活動は、社會的限定に於て意義を有する。文化も雖も生の自己疎外である限り、社會的制約は免れることは出来ない。歴史は社會から社會への運動であり、文化から文化への飛躍である。而して、此の時、社會の基礎が何に置かれてゐるにしても、社會と文化との相互作用を離れて歴史の進展は考へられない。然し、文化は社會と對立するものであらうか？文化が對立するのは、社會の下部構造に對してであつて、文化自身、社會の上部構造を考へられねばなるまい。社會と對立するものは個人であるであらう。然し、人間が社會的であるのは、彼が世界に於ける存在であるが故であるならば、個人が社會を構成するこゝ云ふこゝが人間の特性であらう。個人を離れて、社會は考へられず、社會を離れての個人は考へられない。然し、個人と社會との間には何等かの距離が存する。人間が態度をこるものであるこゝは此の故である。それは人間の存在論的特性である。即ち人間は世界内存在として、存在的存在論的統一である。人間は、開いたものゝ、閉じた者、世界と場との統一である。かくて、個人と社會とは、その間に距離を有しつゝ統一される。此の場合、『人間の歴史的形成作用の意味は場を世界に變化するこゝ、場に於て世界が實現するこゝに存する。』と云ひ得るであらう。ヒューマンイズムの理念は世界である。然し、世界主義とは自由主義的な國際主義でなければならぬ必要はない。ベルグソンの言葉である、『閉じた社會から開いた社會への衝動』とは此の様には解せられないだらうか？此の時、世界に流れ込む、歴史的形成としての社會の進展は、同時に個人化の過程でもなければならぬ。個人を滅してヒューマンイズムはあり得ない。世界主義の表現としての國家主義は反動主義化するこゝを斷じて許さない。國家と文化及び社會との關係については、困難な問題が多く含まれてゐる。それ等の解明は今後の課題である。

ヒューマンイズムは存在の歴史性が、世界主義の理念の中に於て明らかにされたとき、その輝しき勝利を獲得する。(完)

筆者、風邪の爲、執筆が遅れた上、粗雑なものゝなつてしまつたこゝを編輯者に對してお詫びします。